

Nara Women's University

英語科における二年間のとりくみと問題点

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 奈良女子大学文学部附属中・高等学校 公開日: 2010-11-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 荒木, 考子, 加藤, 勇, 堀内, 幸子, 水町, 律子, 吉岡, 一郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/2326

英語科における二年間のとりくみと問題点

荒木孝子・加藤 勇
堀内幸子・水町 律子
吉岡 一郎

〔はじめに〕

「英語における中学校・高等学校一貫学習指導計画の試案」（『研究紀要』第15集,1973）で述べたように、英語科では、「授業を生徒中心にすすめ、すべての生徒に平易な英語を徹底して身につけさせること」を基本的な姿勢として堅持するように努めながら、他方、「試案」で記したいくつかの計画を実践に移してきた。その中から一定の成果が実を結んできている。

なお、このレポートはこの2年間にわたって私達の間で話し合われてきたことを土台にして作られたものである。

〔要 約〕

最初に「試案」における中学の部分の要約を記しておく。

1. 基本的授業方針

- a. 入学時、進級時に教材を未知のものとして扱う。
- b. 家庭学習は復習に重点をおかせる。
- c. 訳は手がたくする。
- d. 授業を単なる答え合わせの場にしない。

2. 各学年の授業方針

（中1）

- a. クラスを2分し、生徒20数名に1人の教師とする。
- b. 口答練習と暗誦を徹底する。
- c. 外人講師の授業をおく。
- d. 辞書を指定し、辞書の使い方を指導する。

（中2）

- a. 英語劇を特別指導項目とする。

（中3）

- a. 動詞用例集の指導を特別指導項目とする。
- b. 2学期に診断テストを実施する。

以下、順を追って述べる。

1. 基本的授業方針について

ほぼこの方針どおりに実施されてきたと言っでよい。ただし、家庭学習の指導の点については、生徒達がなかなか教師の望むような復習をしていない、というのが実情である。

塾に通ったり、家庭教師に習ったりして、自分1人で学習する時間が少ないということ客観的要因としてあげることができようが、それとあわせて、もっと家庭学習のし方を具体的に緻密に指導する必要がある。

例えば、復習する上で生徒達が参考にするノートにしてもそのとり方はまちまちである。この点では高校生も同類であって、教師が黒板に書いたことをそのまま書き写していたり、1行もあけずに各頁ともびっしり書いている生徒も多い。予習してくる生徒でも、教科書の文を1行あきに写してきて、授業中は余白に教師の日本語を必死になって書きこみをするものもある。熱心な生徒になるとタイプライターで打ってくる。これは労多くして益の少ない予習なのである。

ノートのとり方、使い方も含めて、中・高を問わず、予習・復習のし方を今後はもっと具体的に指導していきたい。

2. 各学年の授業方針について

(1) 中1

a.とc.については全くできなかった。私達だけでは実現し難い要素がこれにはあるからだ。私達はこれら2点を中1にのみ入れておいたが、本来は全学年に入れたい項目である。これらの項目通りに授業をするかしないかでは、生徒達の学習にとりくむ意欲とその効果は大きく違ってくるであろう。簡単にやれそうにないが、今後の課導として検討する。

b.は外国語学習の重要な鍵となるもので、単に中1にとどまらず、3学年にわたって重視してとりくんできた。特に中1では、読み・発音・聞きとりの復習ができやすいようにN・H・K・ラジオ講座「基礎英語」を授業にとり入れてみた。①外人の発音を常時家庭で聞けること、②復習しやすいこと、③外国語に慣れ親しめる、という点で効果的であった。

他方、①進度が速いこと、②教科書に出ていない表現が時折り使われていること、の点では生徒によっては少し負担になっていたかもしれない。

辞書は『ダイヤモンド英和辞典』（小学館）を指定している。使い方も指導しているが、中1ということもあり、初歩程度にとどめている。

(2) 中2

この学年では英語劇を指導項目にしている。一昨年3の3学期、担当者が実践した。

台本は泰文堂の「中学英語劇テープ」を使った。

基本作業が終了後、各セクション毎に配役を決め、全員が出演できるように配慮した。

報告によると、「生徒達はみんな楽しそうにやっていた。平均38点位しかとっていないA君がみんなの前で堂々と話したので驚いた」。「場」を設定することによって、「私も英語が話せるんだ」という自信を与えることができるし、それによって学習意欲を高める

ことができることを私達は学んだ。

(3) 中3

動詞用例集は昨年からとりくんだのだが、50年度中には是非完成させ、すぐ活用できるようにしたい。

診断テストというのは、2学期に実施して「その結果を中3から高1への進度を調整する」目的で当初計画したものである。

その中味は、文法事項を中心とし、語句なども含めたもの。中学生としての到達目標（これ自体1つの検討を要する課題であるが）、にどれだけ達しているのか、どこがつまづいている箇所なのかを明らかにし、基礎的な学力を保障する立場からその後の指導材料にあてる。そして、この立場から考えて標準学力テストはどうあるのが望ましいのかを探求していきたい。

〔ま と め〕

中・高一貫教育体制をとり、各教科の試案が報告されたのが2年前。私達英語科のとりくみもまだ端緒についたばかりで、手がかりを求めて右往左往しているというのが率直な現情報報告かもしれない。

この2年間における貴重な教訓は、私達がどういう授業方針をもつべきかを真剣に討議し、それを「試案」として結実させ、第一歩を踏み出したことで、従来にはあまり見られなかった変化を生徒の間に起こしえた、ということである。その例が英語劇の実践におけるA君の例である。

しかし、成績の低い子に基礎的な学力を保障するのはなかなか容易なことではない。私達の間でも、補習にとりくんだもの、追試をテストの度毎にやったもの、1人1人を呼んで1つのレッスンを丸暗記させたものなど、各人各様に工夫をこらして授業にとりくんできた。

私達はこうした努力を大切に、あせらずにまた着実にとりくんでいきたい。そして、ノートのととり方なども含めた予習・復習のし方の具体的な指導、各学年を1人の教師が担当するのがよいかどうかといったことも検討していきたい。